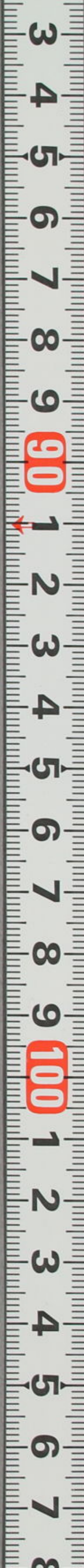




小栗外傳

四

~13  
391.9  
4



内 13  
號 3919  
卷 4

寒燈夜話 小栗外傳 卷之四

東都 絳山歡醜陳人戲編

三傑山獵 西害を除く  
毒婦譏毀 孝子と逐ふ



第七編

且況其日也。將お尋るなんとせし。所ふ忽ち門外。其案内の聲は。入る且。不  
小太郎一人の小賊を。誘引さす。この奈何。前刺せし。しるひつる。  
後者。見せおて。そのけり。三人の。あまなく。喜び。互に。其。終。成。こ。は。お  
小太郎一人の大漢子。縛。七八人の小女。を。引。纏。ひ。居。れり。又。後。者。見。せ。お  
大。蛇。の。首。を。後。者。蔓。を。り。て。綁。し。二人。を。押。荷。ひ。た。り。し。う。は。  
小太郎も。後。者。見。せ。お。も。さ。さ。に。不。審。ら。れ。ど。其。所。小。を。郎。已。れ。穴。乃  
行。ふ。墮。入。り。より。筑。間。次。郎。を。生。捕。ふ。至。は。ま。り。て。其。詳。ら。し。語。り。た。れ。ば。

後者兄弟これ次ぎて其勇畧のほどに感賞し。さて云ふは。我く兄弟呈下をえ失ひければ捜索すわらせんと山ほくりひをこの岨道に居るを頼ふ。頼ふ麻の啼声は。この何方なるやと四方を眺望ふ。細谷川を隔うは對ひの岨に大木の松の梢に麻を居る。怪しやと着一着ればいと怖し。蛇の麻を半吞て居る。蛇のあつちひくと獵矢はひて蛇を射んとあつちひ蛇這方とえ。忽ち麻吐きて松の梢より頭さ下とさぬ眼に二ツの鏡が雙々懸るるが如く。只の箕が二ツ合したれが如し。巨口の中より火焰うとえの舌が振動し。間近にすあつちひ兵助ひれりけは。獵矢をひきりと放ちける。巨口の中に射せり。其射蛇を梢よりかんと落ぬれ。この志とあねととあつちひ。さななて忽ち谷中より這程の岨に

近する草木れ上と走る音。只疾風のよじ。兄弟これ避人と大木のなか木の中を走る。大蛇と兄弟とえ失ひ楠の梢よりえ下とえ。大八郎あり返り。二の矢を射ふ。其矢喉の中より。さおあつちひ大蛇弱く。さつちひ逐て。兵助大八郎の左右に散る。射りし程は。今今日獲物ありしを足とて贖ひ。さつちひさつちひをりて大蛇をくじ牽帰んとさつちひ。重たて。磐石のよじ。母して牽る。能く其路を斬て。さつちひ。此家よ。立寄休人とあつちひ。蛇の首を小太郎は。さつちひ。作り換ん。さつちひ。大蛇住り。笑はれど。さつちひ。足下兄弟容易射る。勇もれ。此後け山に蛇蝎の愁なるは。と揺かく。其切を賞し。

けり。さて斯くの如くは、わが家へ還ると三人各獲りものを  
 持て行んとあられど山路の案内も定らぬ知らず、山賊の手に落ち  
 たりて健やかなる者の七八人を撰み、蛇の首と筑間次郎と、其母の  
 首と三人と七人の女子も、皆持て山を下り、玉簾瀧の下に下りて。小次郎  
 賊主筑間次郎の首を刎つて、城を對ひ、沙汰今日よりこの山は  
 居て、若し命を用ゐる我再び山塞よりひと一人も擧げ、斬殺を  
 せし。今此処より山塞へ還り、我云はるる、我残るるのふ能く傳へよと。  
 賊亦返返して、渾畏と跪ひて、いづれ命を背れやと、痛の途に  
 ざとく。山塞にして、途ゆりぬまより三人と家へ還り、各其父を告  
 ぐ。小四郎も小女も喜び、擒らば、女子亦の家へ、其母を尋ね、  
 其親兄弟の死せむるの、蘇生志はるる、とひみく。

金銀布帛をりて、附されども。小太郎此の禮物を受て、悉く返す行ふ  
 こと。是神の仏と、喜ぶ。此女子のうちに、多喜の郷のもの  
 あり。小栗助重も、このや、彼人々。その勇畧の如く、感、彼輩の  
 勇名武家の忠臣なり。彼家一回立ち、と名家のふ、其後  
 必と復古する。とあり。彼者ども、其家より、今起て  
 居るべきの生業、はは、何方仕官ども、計、我許、  
 養ひ置各武家の名復古の耐、歸、俄、使を走、美登  
 小四郎。後、少助を招、母、貯へ、二人の  
 助重が、遠慮の如く、感佩、子供、助重の臣と、已、主君の  
 行、美登小太郎。後、兵助、後、大八郎の三人、矢口津、命を、新田の



大蛇 殺す



後藤先路 山路

後藤大市

後藤先路

臣の再生めて是れ又前世の縁歟ひいて今君臣となり三世の契を果  
る。昔光過易く日月撥れり。小栗判官代助重を本國常陸の國  
多氣城に居る。既七年に及びたれ。善政日々に新なり。ほども  
民の風も善。母の行ね。天も感して。風雨十五の節を失る。是  
五穀よく熟。民の電も賑ひり。されば。此村も。他國より盜難の患  
去る。民これが為。苦。一。ゆる。地方も。多。り。し。り。と。小栗。う。米。邑。の。道  
路。も。落。る。を。拾。り。を。夜。も。戸。を。さ。ら。に。枕。を。高。し。て。太平。を。淫。ひ。さ。る。を。  
助重。民。神。を。又。斯。て。三。年。四。年。から。ち。母。飢。餓。賊。難。の。愁。ひ。め。じ。と。は。は。  
我。回。り。君。父。小。見。泰。世。と。且。母。没。命。多。ひ。て。よ。り。と。や。支。一。回。年。を。速。  
ぬ。れ。い。君。父。母。も。又。と。あ。し。母。の。墓。も。結。ぶ。や。と。多。氣。の。城。へ。池。の。庄。平。と。  
と。い。ふ。義。登。小。太。郎。後。友。兄。身。の。外。郎。等。數。多。残。し。て。城。を。守。り。せ。その

身。池。の。庄。司。風。間。兄。身。加。藤。兄。身。と。宗。徒。の。人。に。數。十。人。の。下。僕。と。し。  
俱。應。永。北。八。年。二。月。常。陸。を。旅。發。鎌。倉。へ。と。赴。れ。た。れ。高。く。旅。路。  
め。ま。ざ。れ。と。助。重。素。より。遊。記。好。ま。れ。道。も。ま。ま。の。地。方。も。な。く。日。あ。ら。  
と。て。鎌。倉。へ。到。着。け。れ。ば。父。小。對。面。し。本。國。の。光。景。を。物。語。り。且。八。人  
の。良。客。を。招。き。し。と。又。告。げ。え。池。庄。司。加。藤。風。間。の。兄。身。と。父。の。兄。身。  
み。入。じ。ね。れ。ば。滿。重。も。よ。れ。郎。等。を。招。き。り。と。喜。び。ね。叔。母。の。次。日。は。所。よ。泰。  
持。氏。の。こ。え。も。入。り。し。に。君。も。ま。じ。び。ま。じ。び。と。多。く。れ。し。手。物。賜。ひ。ま。り。助。重。  
熟。く。持。氏。の。光。景。を。癩。ふ。七。年。が。や。を。経。ぬ。る。うち。昔。々。の。異。は。して。  
萬。風。流。は。驕。奢。の。ま。り。人。さ。せ。め。ひ。は。ね。か。公。の。行。跡。く。終。り。し。流。も。な。ら。ず。  
と。幾。回。り。ひ。つ。れ。と。誓。付。し。側。小。使。り。終。り。外。村。の。や。う。め。て。親。く。ん。ま。り。も。  
好。り。れ。ど。且。と。年。將。の。身。を。り。て。賢。教。も。も。畏。れ。ね。ば。と。い。ふ。念。さ。る。





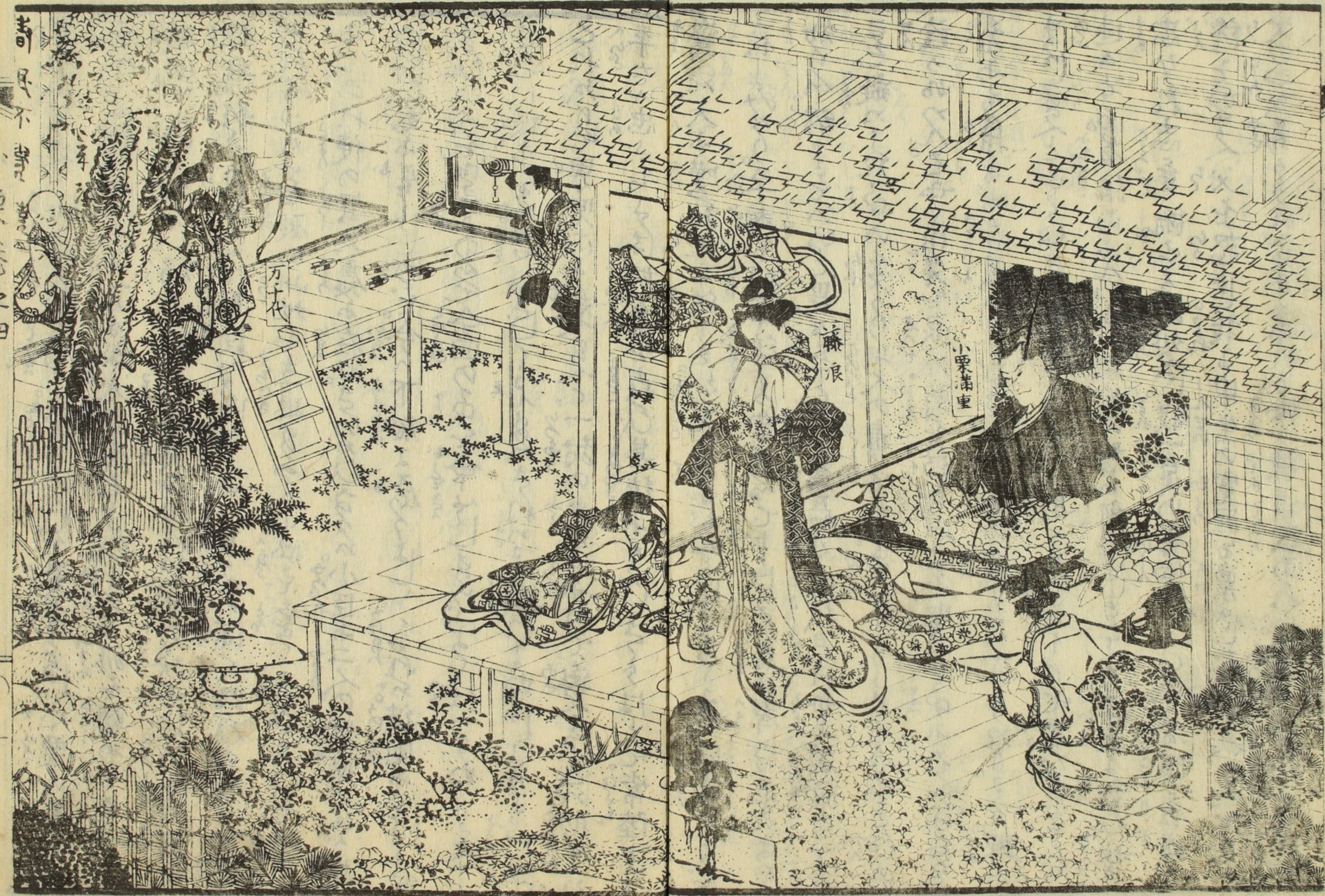




失ふんとのふ猫も死なせしめてはなれぬ。怒りたることかたじけなくも殿  
 助を君の行跡へ人も知りては孝子よもさふらして大逆の企てはし  
 るべし。これより子細こそしりぬ。一旦の怒りぬ。卒忽のつとめあり  
 後必を悔ふふこと信ずん。怒るがごとく慮りぬ。と判官代平生の  
 美を奉て誅を依もて満重も此誅をゆき少しく怒りぬ。ゆりされど  
 尚疑ひ暗さやゆりぬ。平太も對ひ譬害心なれぬ。せよ毒の物  
 を試みて父がゆりぬ。傍る條子たるゆりの。做るまじくは君父疾ぬ  
 とこれ臣子たるゆりの。まづ其服せきを嘗とらぬ。助重も知りつぬ。  
 汝目今判官代がゆりぬ。往て其子細を殺さぬ。とゆりぬ。平太は  
 主の怒の少く解くを喜び畏りて徑に別荘に赴た判官代助重  
 にお對面して今日の光景を詳に述べて主の命を乞はれぬ。判官代大まふ

敬馬に天も嘆死地は泣く。幼児の母もおぼしこととて泣きしめて  
 哀しみたり。平太も傷泣く。中あつてやける君の孝なるをよよく  
 知りぬ。那ゆりぬ。と畏る。且て我養君万代君れ母上。波浪の心  
 こも疑ひたるゆりの。此人の毒も命をおとす。ゆりぬ。こと何の  
 詮らぬ。ゆりぬ。ゆりぬ。退れ時を待たぬ。賢きゆりぬ。ゆりぬ。  
 老も角も君も悪くも。孝の道もたつた。ゆりぬ。練ふ  
 中しゆりぬ。とて。助重これを父斯て我死をりて罪なれ。こと  
 速るとも。波浪の心かぎりぬ。父の怒り解かぬ。とゆりぬ。平太も對ひ  
 忠なる志を。結する。ゆりぬ。我一人の害心は。とゆりぬ。波浪  
 後とかゆりぬ。父を怒りし我も申生の冤罪を。直した。ゆりぬ。死をりて  
 父の心も易くぬ。ゆりぬ。汝が諫道理ぬ。ゆりぬ。死をりて時の

毒々毒々  
計り  
父の  
子の  
間  
隔  
も



奇  
不  
可  
思  
之  
也

小  
栗  
葉  
重

九



折々ら俄に門辺へ一罵り呼ぶ声されば三人の怒り何れもさうも出さ  
 るるふ一人は天狗五郎といひて一色詮秀が下僕なり一人は小厮此天狗  
 五郎といひて元来頼の悪漢めて力量敏捷の達人なり平生高きより  
 下まゝ花ぶさこ自在なれば天狗といふ異名せり一色此ののを忌みたること  
 大々さうらびめりたり。さき主の權威と己が力とを争ふ日く市街に  
 出く悪口をれを傲す酒肆へ入る飽すて飲ども一回もその價を償ひ  
 事なし。若し其價を需はとれば器皿を投破店をうち毀暴悪擅ふす。又  
 と一色の威を恐れこれを咎むるのほ三輪七が家も折くすめて酒肉  
 を食くと終小一錢を償ひては。今日もまた飽すて飲食して去る人  
 とを志すはよ小厮の近日とくおすもるりのかれば天狗のくを志すは酒肉  
 の價を需はとす物欺をていふ汝の我を知るとや。家も天狗とさふ  
 ののさうそ近日のうら天より金銀の兩とある。其時酒肆を償ひて  
 云はく。去退へとされ小厮の嘲弄せしはを償ひ前後のことを願ふ  
 しきすめて罵りりる。汝は漫言りて我を欺く。天より宝の兩  
 ありて汝がふらるを付入酒の價の明日を云うと既に今春のあは  
 べ。今日錢をうら衣服も脱て去とありはあそ天狗大に怒り。これ  
 此手頃都鄙を横行も多し。酒肆をうりて酒を呑ると一回も衣服  
 を解く酒の價を償ひては。汝我を扱はよく脱てと云ふ。さうぞか  
 欺け小厮はよく怒り。我よく汝が衣服を脱てと云ふ。追々近きる。正  
 天狗拳を極うら。小厮の眉を走らう打らけ。さうぞか。さうぞか。さうぞか  
 たまうらんた。地は倒れ鼻口より鮮血流れ出て苦しき。吐びさる  
 三輪七これを着て慌忙く天狗を叩きつけて。此小厮近日を抱へ

小栗卷之四

十一



此國より東の邊に三人心を易かり田鍋兄弟の  
りし此地方に居るはしと告知せさせて生産の  
少くは貯めれば是を本物とし仕熟酒肆を出し三人を合し生業  
お台よりざりしうぶ三人の口は糊とるふ易くまがく北地は忍居る。

第八編

一老城一死一奸邪誇  
兩雄を市ふ得て因縁全

柳此結城とらふ地方に結細を織をりて平生の生産とて諸國より  
高人々に集ひ其織下の緒を買入る旅客の経回々土地自ら  
富饒して青樓酒肆軒を並べその繁榮をとく京滯念ふ及  
けり一筋のつば一失ありと切都合さる地なれば其民自ら驕俠客多  
國争日よほして民の煩多うりた然るふ三輪七く酒肆を築

俠客ホ日毎ホ酒肉を飲食し果ハ國争ハ仕知るを田鍋兄弟  
素より力量敏捷の少年あれば是は割し止むるも一回も不ぞとら  
しは此子御々に笑へる行ふ此土地は腕とるる俠客ホ彼ホ兄  
弟を慢るにこそこれを恐る三輪七がりとてつらつら人酒肆を  
のほし后々田鍋兄弟が武藝を慕ひその技藝を学んて次々  
素より好る道なれば相撲太刀合の業を教はるが衛々お学ぶと  
後々結城中の任侠ハ皆田鍋兄弟の弟子となりけり一日田鍋  
の弟子ホ六七人街を往來し酒肆お過りて乱酔及び再び街中  
傍若無人の誇り歩むる由緒ありびる武士の六人打連立を  
旅客の西より東をさしてあるのめじが間なく酔ねの俠客ハ行達  
りり俠客ハ碎る乗れ此旅人と通じまじと往還をまじり多しに

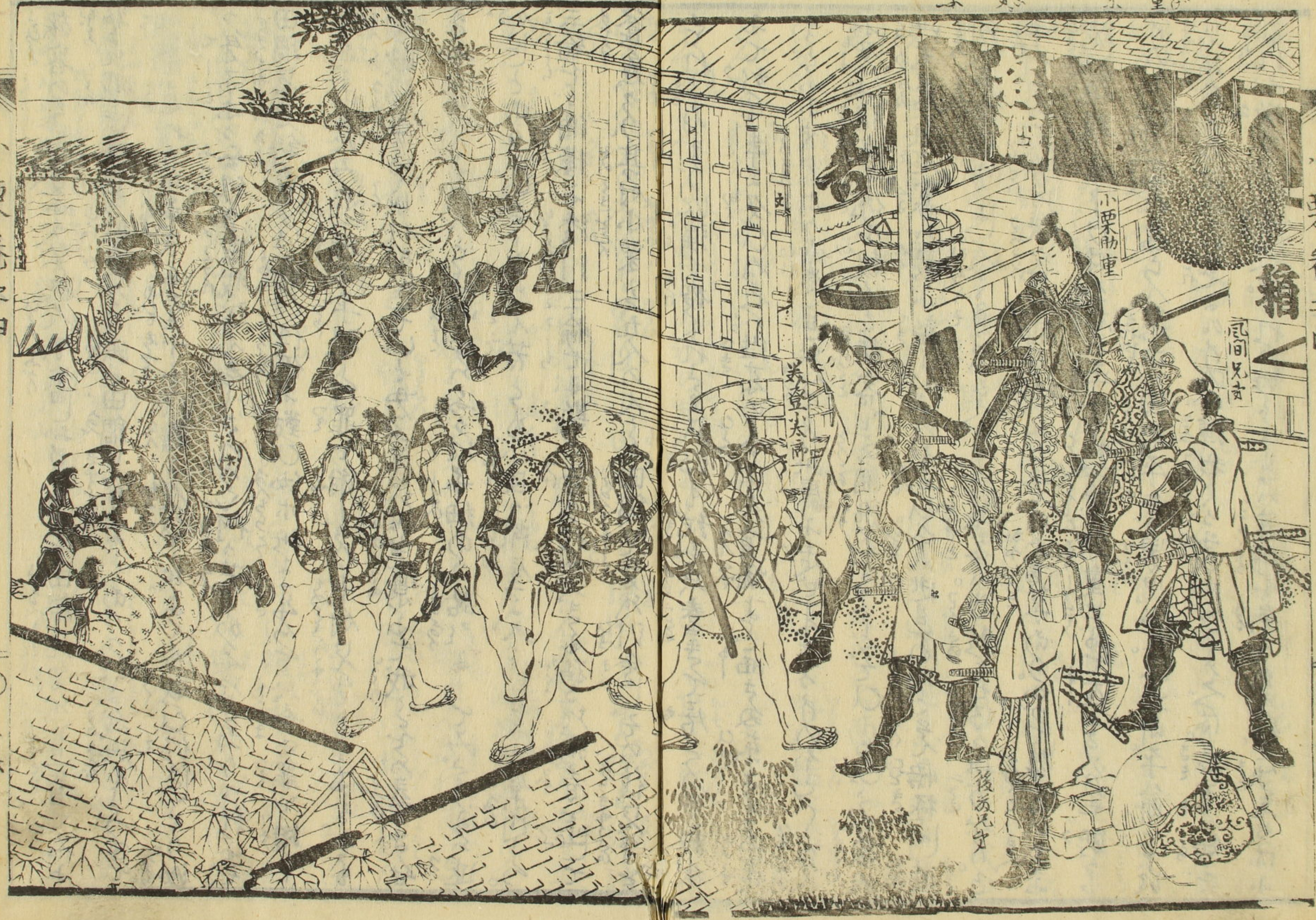
悪口と云ふ旅人憤りの既ふる及ぐんと其時旅客の中に老實やう  
 かる二人の人の人を制し刺客を對ひこれの徳倉方ののめくこの  
 地方小尋ねるべき人のりてすむるのりて其所を去る通らぬ人としん  
 刺客亦うち笑ひ徳倉人としん他國めておれて通らぬもあつらん此地方  
 おおめての官領執るゆめてもあつせ空しく通はし強て通らんとする  
 我々が腹を割りて海りのくと欺れられ旅客亦たまに怒り汝亦土民の  
 身と武士を對ひ悪言ををりてと後急ぐ逸ふ通らぬ子細は尚  
 支ゆることなうらう一と投殺して通らんとしれまけはる面白く  
 らるべしと進ませる旅客亦一般に心得るらしき急勢に猛に刺客と  
 とめての投殺しての投はる初童の戯ふ玉玉とあつるがむとく三四回  
 まて投とるる刺客亦を初の勢ひあつる似もはると思はれ戦く遊人と  
 それにおまりの強く投られしはるも記を只書き居るけりけり  
 おておは奉り及びぬれば往來の人々十六宣流よと西きぬ東きぬ走  
 まるとお刺客亦が堂々こと狐々より此處小走せまけるのりやと百人  
 お及び朋友の仇を報んと旅客を多圍逃とまどとそひひゆる旅人  
 此光景を人寡の衆小敵かこれをしてひ今の逃はぬ処とぞ悟極め其  
 所へ声を高きし人々兼忽とてうらに旅客の我れをちるの方なりと  
 呼たりて大勢の刺客を制し出する二人の大漢子ありやうて旅客のあふ  
 跪れ低頭してかけはる君の正しく判官代助重とめて在まるとはや斯  
 りのをいふ忘れぬらん其亦田鍋平と男見めて平六郎平八郎とや  
 兄弟のりのにるは是よのりのの渾我くが才子かとては君を人知と  
 をれを做せとぞいふこれ知らぬは其料を免るのれとゆえはは小

小栗卷之四

十四



遭<sub>あ</sub> 兄<sub>あ</sub> 田<sub>い</sub> 結<sub>むす</sub> 小<sub>こ</sub> 栗<sub>栗</sub>  
助<sub>たすけ</sub> 重<sub>むね</sub>



順巻之四

小栗巻之四

小栗助重

箱

武田兄弟

美登大前

後茂兄弟



云々の事なれど人々大まふ事なれる中にも。義孝小を郎後後兄守のほく泣く。
 君と艱苦を偲ませざらん。臣の道ぬめふと不日再結城はすめり互ふ
 憂を結りのひ。是より十人忠をそして助重は仕へ主の秘氣の免んゆと
 顔ひ。其耐をこそ待りけり。不在話下再脱鎌倉はれ小栗孫五郎
 満重の一時の怒りに乗し助重を逐はるが中。日月を待つふとさびひ其
 日比のさびひ物。漫は愛血くいと不使さひ彼の素より孝子なりしゆ。
 いろなれど我を毒害せんといはる中へん。こそ必を故のりぬるなれ。その
 こと同ひ明らもど一旦の怒めはりし。追失ひし我誤くと後悔めと頻
 なり。それより久波浪おのれら謀成はれは限りなくさびひぬれと助重を
 殺さる身を幸なれんとふ想ひ。いろめゆ満重の怒りを慕し助重が
 行色を尋ひて害らむや。と又諺言をいへると満重さへ小聴とぞ聞く

波浪を疑ふ氣々々着人々れは斯て悪しと。其耐其こと致止まりしはれ
 ころに先年持氏公よとささし家校入道禪秀が子小家校宮内左輔憲秋
 同舎身治部少輔教胡といふのりなり父亡びて后京より召軍家召
 仕へたりし。父の仇を報りんとさへ心頻かると時至らざれば空しく日月
 をとらけり。近以持氏公の行跡いと踏らせり。以京都の召軍家(討)
 されのりまよりし。久將軍我持公憤りし。ゆひ内へ徳倉を止さん。おれ
 たりありし。世の中は危か。色めも出り。家校兄身是と察し
 密に父の仇を報んことを嘆れんとす。お軍家以許容めり我へ知らせる
 ず。お母父の船を報めと稱し。又身が女をせめて。角も討らふ
 る。いと仰せ下さ。は。憲秋教胡大ま存し。一族家人を傳ふに。よ力
 同意のり。既一千二百騎。及ひたり。斯て宿志を遂げは。と。

信豆の二馬を以て攻下りし小鏡倉より居るをれ一也家人なら一さうさ人も  
 支と渾妻子を俱とて去り逃去るはあどふ手にありのもかく終ふ  
 相別を乱入一在く正しく馳向ひ代官は家人を捕へて首を切掛しうと  
 しては故も村氏を空都に教へておじり家校兄弟の尚義倉  
 まで責入んとさうれと僕たる勢のう入ふ且内意の徳力なげ且ん  
 さうさふ義倉へ入がう再び赤おるなりよりけり。此家校兄弟の弟小栗  
 この家校の 九馬以村氏と京都軍家を取兄弟とて我をうかか  
 ありとお同し憤をうて終ひ今回を我よりして付んと其順依るらあて  
 戎器を集め軍兵を訓練し今も軍を治せられたりしと執りて家校  
 のつたの 憲実大は警れ村氏を警練めなれとさうと馳入るりどかか  
 小栗満主を以て軍馬訓練のり次命じり入小栗孫次郎を以てさう

大に小鏡倉に村氏を向ひ命畏りしはこれと今天下昇平して庶と逐ふ  
 の射はあふに再々母がうりまのひり此事京都軍の傍聞入らむ  
 京都湯倉忽ち兵越の丘間となり付人再るとれは先祖への不孝世  
 の僕まことなりゆひさんよとや此事お同し止まらせとや人と練まむ  
 村氏を大に憤らせまひ汝の老練の武士とあひ一大事を命せし母  
 麒麟も老ぬれぬる馬は劣はく中らん嗚呼臆病未練の白痴かた  
 さやうの人あつて此を任させんとくまうの福と宣ひつ懐内保く  
 入るの良きおはむ若く忠言耳は送めと常言のごとく小栗の君と流  
 く不直をせかりとてくとしては所を牛のり足より引籠りて流るる  
 りのこれ正小栗が家の断絶とて時に至るるあやな浪と思議の  
 係と没け申し其のゆいよとて満を君の心不審をせかり終り征伐せられ

多岐とて方見えられ後浪の助重と失り人謀めて人をして云りしつら小栗  
 判官代助をこそ父の御事を業の家の追追憤りのおぼえを父よ仇  
 さんと近比無頼子牙を語らひ錦倉中と放火し其罪父お帰せんと  
 ぞ云觸さしつは満重と引籠居れは此の夢をうりもゆめと有るる  
 おつら持氏公の心算お入り。あう憤りせめひ満重おのれが子の鎌倉を  
 強せんとしておれをゆめあがら。知を教して居るでう其志氣涙と疑ひる事  
 のへ例の一色詮秀この心算を伺ひ此附らと小栗を亡と云りしてと  
 持氏公の心算におて云中。実のちから小栗満重前日君の心不忠と  
 業のしと憤り我子助重は鎌倉を強し其まぎれお乗し君と傾け  
 するわらせんと内。京都の命を業おはしつゆりゆと後しけれは持氏公  
 豫て小栗を疑ひまの正ならは一色が諛を是くとおぼし執り頭人の

輩は評議もなぐ小栗を討た多のんと俄に兵を召集ひ多執り家杉  
 憲実これをきて大に驚き例の一色が諛を信し多斯のさしめまふ  
 めんしと心き所は多のり多く練なれと持氏公の聴とけもあくなぐ  
 此奴のを募らし多の家力お家お還り。蜜お小栗のりてこの  
 中う次生り多れば満重はたは驚りなれを石所まといり陳ト  
 中さんとのりけれを田鍋平太流はは持氏公の心光景を伺し一色  
 詮秀の諛を信用し多の。しう母陳し多もいって此許容のあさこまや  
 冤罪の心會次没し多のより早く本國お下りなすひ時の至るは行て  
 執りおはして此諛を解多の君の不明をおおひ且小栗の心  
 家全れと心おと。お勃めらおおを満重実お道理なりとまより俄に  
 本國常陸なる田氣の城お逃下りぬ此附は是應保三十年五月のころ



家  
秋  
憲  
同  
教  
朝  
相  
州  
と  
乱  
妖  
毛

持式此由なほ百大さ小怒らせし急ぎ征伐とて一色詮秀一千  
 五百餘騎をさへして常陸國を下し小栗満重伊人今詮秀を  
 討つに怒る一色が乃小擒とならんをサ念のゆゑあらぬ一軍して死心乃  
 りとぞ知らさざやと頼龍城の准佐をなしたる。これ小栗判官代  
 助重へ父満重君の心不審な蒙り田氣の城を龜城とて守侍る。小栗  
 十人の侍臣と將て田氣の城より越前の御音を免され候は。城を  
 一と瓜池の庄平田瀧平太ふはひて父満重小嘆えたる。満重も今の助重を  
 逐しを悔し討たれ。對面してやうに我先途をえ。由人と龍城を望む  
 こと健きふも驚し。これそもく。這回持氏との心不審を蒙りし。せんを  
 処汝鎌倉を騒動させし。の流言より起まる。然るに今汝を此城を龜城  
 させし流言のよく實り。ゆゑに不忠不義の名を後世に残さる。此何ふ

を念なるゆゑにめ。此道理をよと。ゆゑに汝城のこゝろ。止れ  
 せ。さして此回のゆゑ一色詮秀。我家を亡し。亦頼を存せん。ゆゑに  
 かり。且君の心行状をさう。今故なき。軍馬を訓練せし。戒番を自守り  
 これおそく。京都を傾け。多らん。おぼし。たちあや。其のゆゑ。前日我を命じ  
 り。い。ほど。よ。時。常。なり。と。強く。練。め。な。し。ゆ。心。氣。を。換。へ。終。り。一。色  
 が。行。き。な。り。か。れ。れ。危。也。も。角。也。も。逃。が。ら。き。我。身。を。以。て。汝。を  
 擯。ず。の。身。を。維。も。知。れ。ぬ。は。の。方。あ。も。忍。び。居。て。我。討。死。と。言。え  
 る。仇。と。一。色。と。討。た。て。家。の。名。を。再。び。故。に。覆。さ。し。星。や。愛。の  
 孝。あ。ら。と。涙。お。ぐ。ら。小。栗。え。る。助。重。を。中。より。涙。を。咽。り。り。が  
 中。め。り。と。云。出。る。は。君。の。流。き。思。ふ。は。一。色。が。流。き。奸。悪。め。れ。せ。く。お  
 を。念。め。り。と。星。彼。の。こゝろ。も。お。ぼ。し。明。ら。あ。ま。ま。し。ひ。て。命。を。拜。ら。に

侍らば子として父の死にとどろきしうでえきとて去らばるまき不臣  
 不孝の名を負うとも天日しやう地は隕後びつら冤罪の明くあ旅行  
 てもはらへふ御城のこは免めれ家名を建てる身の方千代たつや  
 然りふんとりは満重俄に氣を替へ我一旦ふ眞世子ふ咄にこそ  
 對面とらへ郎きの手前も恥はさかなく家名を遣さんぬたけお  
 手道理を侍らうなぐふとして父の命を聴きこれが不孝あわらざる  
 さる白痴死して我子とあはれし助重は親子の縁もこれ限りとしく  
 去縁と違えり紙門の裡あふより助を悲しき中うらむねく熟おりの  
 去順父の勳氣を悲かりて結城の里に潜り居憂日月を送りつて父母  
 對面せんとて神や佛お祭りしお其甲斐ありて今日只今父よ見ゆは  
 嬉しやと想ふ間もたぐ怒りま違ひそれさ憂いとあひまや永れ別を

傲へん嗚呼無端世の中やと涙よろ々贅言の道理やもまき憐なり。  
 池庄平田鍋平太の前刺より此女も在て首尾の光景を父も居らこの時  
 二人齋しくさりのけはは嘆かせることながら大殿の心君を悪くと  
 おむさむのむだ後裔なれとを嘆きせまひつと怒りせしむながら其  
 心志をなすまより果しあふは孝子の父母没と雖善をまさん  
 として父母の令名を贈んとてあてを果てし内則ゆもいらさや  
 我もも君とともは大殿の心志を継ぐと存されとある年彼の父の  
 うへ果さむに間ふ亡人の教ふ人へ必定されけ今潔く大殿の死出れ  
 心付とえ悟せり跡も遺せる男児おを我くもみそまは台仕ひもひ  
 みの眞加母のまは因て今世の顔ひぬとて信はる人へ圓へる体  
 助重の父の命といひ且二人が誅るふ詮とてあて肯へ二人の深く



感謝をのり斯くは主家様も我々の後裔まで送念はし。いづらむ  
 此學の長居の妨多しとて下城し又と催促せられぬ助重は公錢しく  
 泣くも田氣の城をすうて入り十人の從者待らけて城中の首尾に向  
 み助重のりし事どもを詳み申えさす。さて中へ入りしとて又乃  
 宥期をよすふと人へいと忍びがは事なき敵寄へ小勢なりとも後  
 詰して追拂人とあめ。汝も我力を助けなやとのりさるふ渾一般に  
 いづて艱苦を君と俱みせさるんと。いづれ助重も甚むさうら便宜の  
 所は忍び居るべしと從臣の輩と議城より二里をりも隔る山林の  
 主従十一人を潜て伺ひ居り不在話下且説鎌倉の信頼村氏と  
 小栗満重次征伐せん一色詮秀と大将と一十五百餘騎の軍兵と差  
 向ふ。寄手城近くにおもせ陣を取らば亦小栗満重これ次望着  
 く寄手のえねの一色詮秀とて入り是れ我怨みの入なり。いづれこの伎  
 倆を追散しめをよら詮秀次討取る。と遣兵三百余騎とて池  
 江平兵衛先にお追て打ておはる。案も差ほど寄手の伎整はさすは  
 陣一すもさへと乱れし。本陣もなれか。本陣も俱崩れて  
 らる。小敗北し遠く逃去りし。池江平兵衛下知し兵糧武具を奪ひ  
 城中に還りし。寄手初度の戦は利を失ひ大まき氣膽れ。城を攻ん  
 ず我勢もたかく遠く退ひて陣をとりし。城中よりこれを伺ひ又も悪口を  
 欺死せり。とて又驚けれど固く守りし。出念をこらにおめ。城中より  
 或は朝の夜討りとされ一度も勝と。いづれ寄手もさう懼れ  
 斯くは始終覚束はしと鎌倉へ斯くは進と。持氏もす。近國  
 の悪徒はこれ左祖せよ由り。大事に及ぶ。いづれ我自ら走向

一時責はさると俄に護倉が出馬し、あつた氣の城に陣ある小栗の  
 主にさくむくことだれこれより城兵の討て出さるは、邂逅奇き城責  
 をれなく防ひて、つら落びやうとも入さりけり。持氏と大なる兵隊多し  
 士卒を下知し、自ら先小進を既堀隈まで馬を乗寄り、その時  
 大手の門に櫓を掲げ、小栗孫次郎満重赤地の錦の直垂お掛、絨乃  
 鎧著て、扇を揚げて持氏を挿招し、高きうみし、満重はよりのく  
 君へ入り、さへ入れ、畏れと止ことなれば、怒り、多人小臣を對し、さう  
 聊野中をさし、狭きと、ひと色詮秀が渡り、よんで車既まら、お及より  
 小臣背たち、さへは證、あつた出馬のり、我より戦を催せ、さう、さ  
 君より、次、つら、お、な、り、そ、も、く、君、の、寛、仁、ゆ、り、政、道、も、正、し、か、り、は、一、色  
 と、つ、ら、悪、魔、は、き、は、を、乱、し、な、り、た、り、そ、の、奈、何、と、な、ら、ば、治、世、は、武、と、な、れ

が、は、良、好、の、常、と、云、へ、と、今、故、な、ら、ば、俄、に、兵、隊、網、詰、し、我、器、が、集、ま、る  
 こと、何、の、所、為、ぞ、や、想、つ、ま、京、都、お、軍、家、を、傾、け、ま、ん、結、締、な、ん、足、臣、と  
 志、て、君、を、弑、さ、る、の、大、逆、な、り、い、つ、て、天、道、の、慈、護、め、ん、と、や、勢、ひ、お、乗、上、  
 本、意、が、遂、々、あ、つ、つ、も、反、逆、の、名、を、逃、さ、ま、じ、小、臣、此、を、を、嘆、れ、諫、め、  
 死、を、は、ら、臣、下、の、常、な、り、心、を、裂、れ、比、于、あ、及、か、ぬ、ま、で、も、練、め、し、お、眼、が、  
 東、門、に、懸、つ、れ、伍、子、昏、が、才、よ、な、り、け、り、ね、今、の、自、殺、し、て、は、憤、を、晴、け、  
 ち、ま、ん、小、臣、こ、も、悪、き、あ、つ、つ、も、城、中、に、あ、る、の、ご、不、便、と、お、命、を、さ、り、と、  
 助、け、ま、ん、と、い、ふ、も、も、鎧、を、脱、ひ、つ、結、祖、き、氷、な、ま、短、刀、次、左、の、脇、に、突、き、て、  
 右、へ、さ、り、と、引、上、せ、ん、殿、お、ま、つ、れ、池、庄、平、主、の、首、を、打、落、し、か、つ、刀、次、は、お、  
 驚、く、俯、お、な、ん、て、失、お、る、此、南、射、城、中、俄、に、火、發、り、焰、く、して、焼、あ、つ、れ、此、  
 ま、ま、つ、れ、お、乗、上、城、中、の、男、女、揃、手、の、門、より、逃、れ、出、れ、一、色、詮、秀、は、ま、ん、次



交々落城  
藤浪  
千代を  
持て城  
を逃

藤浪

千代

西遊記

西遊記

二六

二六

討んとせし持氏公小栗が寂期の願なり。叶へばと制しあまの  
 城中のりの孫お逃ゆこと成りし。此時養護も万子代を俱し城に  
 道に其行跡をたづねる。田鍋平太と城中にて自殺せしと。小栗  
 小栗判官代助重へ田守城の後詰せんと山林中を以て寄る。此  
 事なり。天よふ測の雲雨のれば人小不意病あり。此  
 高村助重風のこもしてたれ。漸くと重なり。ゆひて終へん。人  
 を知らぬ。かひし。十人の侍臣ホ大に。保あらし。し。と。  
 尚國へ小栗征伐の軍陣よ。て。此地方の民四方に散乱し。醫者も  
 のある。は。耕耘して糞せ。は。稲梁の。た。命。志  
 ありとも。速小本服せん。と。東は。人々相議。結城。近。住  
 訓。地方。彼。行。治療。加。病。助重。扶。下。総の  
 結城。借。此。三。論。既。没。命。田。鍋。足。身。武。藝。の。子。子  
 多。り。ほ。此。人。の。情。よ。て。想。す。に。治。療。を。做。二。月。を。と。  
 経。て。漸。快。く。あり。ぬ。十。人。の。侍。臣。ホ。喜。ん。で。し。ら。田。守。城。の。後。は。あ  
 べ。と。人。数。を。語。ら。し。と。田。氣。を。落。城。一。満。重。生。害。と。い。え。れ。ば。今  
 と。誰。が。為。後。結。せ。ん。と。助。重。が。嘆。ま。さ。ら。も。云。と。十。人。の。侍。臣。ホ。も  
 親。を。亡。し。妻。子。を。殺。し。は。れ。悲。し。憤。り。に。限。り。し。此。う。を。一。と。  
 経。秀。公。討。て。此。心。を。晴。と。一。と。日。耗。を。み。と。海。島。一。還。り  
 ぬ。と。あり。し。此。上。の。満。重。ホ。至。り。仇。を。報。ん。と。從。十。人。の。侍。臣。ホ。も  
 旅。弁。て。満。重。と。も。執。た。は。爾。れ。も。小。栗。助。重。へ。持。氏。公。の。討。つ。り。し  
 満。重。が。子。な。れ。ば。明。白。小。鎌。倉。入。る。と。も。さ。相。模。困。權。現  
 堂。村。と。り。旅。宿。を。需。め。時。此。所。再。滞。留。し。一。色。が。行。状。を。伺。ふ。

小栗判官

二二七

詮秀が常陸より還つて后君の御おぼえまじくよく小栗が舊館に入  
 賜の其おぼが別荘とは日毎に行き遊観の所とあるはしはは  
 小栗大なる憤りの行時も早く彼を討て重なる怨を晴さん主従十一人  
 皆現堂村をもち直井鎌倉へ行んとせしと世次悼むる大なる  
 と悪うりかんと此地方より鎌倉へゆ山越の困道あればさるる意ひ  
 行んと其道を捜索てまはれはあふ人里中を山路のさる道次  
 同之れ人家もななく少く山樵牧童のみ中遭のさなればさるる意ひ  
 るまきを右舟漕り西小築平へを北よりまじし俵は五六里さるる  
 する行程を朝より夕舟至るまでたどりしうまじく一の小舟さるる  
 着ぬこより林麓の方とて下せば大きなる庄院あり中道七八十  
 軒の小家さるる小栗想ふやう今日既に申の下刺舟近はさるる  
 今夜はとる梵舟宿を借らむやと頼をひりて人家在所お至りしお  
 数十人して一乗の女樂女とり囲む大道狭く通るは小栗主従とれ  
 をえて是の此地方の地頭が代官さるとの妻と女兒の往來さるるやと  
 皆を立を傾け道の傍に寄せて通りさるとと先導の下僕ありて  
 憤りの汝おの何者ならぬ我姫君の通りまふおまじく取らるとと勢力の  
 下僕さかるとて人々のまじかひとり捨たり十人の勇士等太まお怒り  
 我々の代圍ののなれば此地のこぞ知れ然るは如斯狼藉お及ぶ  
 どう奇怪しとまじまじ小栗制し止めてこれを詫と下僕さるる  
 小栗が詫らぬ衆尚悪言を出して恥らしむる勇士お堪へが後  
 るとく車お及んと其耐辱の裡より傍ありはれ侍女とて下僕お  
 を討はまて小栗お云ひはは目今下僕おがそれをお怒らぬやと

旅人由同きわらきほことゆれが今夜の我家お宿りもひらんやとわり  
 けりか小栗さうらにゆかぬざんといひ今も生身の入とさるるこころ  
 のまかへに今夜の宿をさへ借んとゆれが其らふまはりし侍女が殿お  
 ぼひと侍れ行ふ前よ小領よりえりし壯院の前お出ぬその巖重  
 ろのうと城のうに彼響の此壯院の裏は榊入より侍女も續て小栗  
 主従を侍し入一軒の別館は清くろり小栗を従いと不審こそ何人の  
 館まで響中の婦人の何等の人もあらずと各只これ夢のうと又酔はる  
 おとく悦惚として居りけり。

小栗外傳卷之四終

